

福島第一原発ルポ

昨年6月25日、宮本憲一先生ご夫妻や若いゼミの仲間らと福島第一原発を視察した。

レポートでも書いたように、あの事故の衝撃は今も忘れられない。それから7ヶ月余り。中日新聞2月10日朝刊の記事に注目した。



リードから—2011年3月の東日本大震災で

未曾有の事故を引き起こした東京電力福島第1原発（福島県大熊町、双葉町）の構内が5日、日本記者クラブ加盟の報道機関に公開された。事故からまもなく8年となるが、原子炉建屋付近ではいまだ高線量のまま。1～3号機には溶け出した核燃料（デブリ）が残り、取り出す見通しも立っていない。

1日に4千人ほどの作業員が働く第1原発。構内は汚染度に応じてエリアごとに装備が分けられるが、全体の9割以上は、マスクや一般の作業着のみで行き来できるという。記者らも同様の軽装備だったが、線量計が配られ、東電担当者から「女性は子宮の周囲に線量計を付ける必要があります」と指示を受けた。

構内は専用バスで移動。まず、1～4号機から100mほど離れた高台を訪れた。水素爆発した1、3、4号機は事故当時、原子炉建屋上部が吹き飛び鉄骨がむき出しになっていたが、3号機は鉄骨が撤去され、昨年2月にかまぼこ形のカバーが取り付けられた。使用済み核燃料をプールから取り出すために設置され、3月末の作業開始を予定する。4号機も真新しい鉄骨で支えられ、内部は見えない。

1号機は今も原子炉建屋上部がむき出しで、鉄骨の内側にながれきの山が見える。現在は大型クレーンを遠隔操作して撤去している。

2号機の原子炉建屋はそのまま残る。しかし建屋内部は4つの中で最も高い放射線量で、格納容器内では毎時70シーベルトとなる部分もあり、死に至るとされる線量を大幅に上回る。

実際に2号機と3号機の間の上では、ピーピーという線量計の音があちこちから聞こえた。毎時0.35ミリシーベルトは高台の3倍以上。3時間その場にいれば、一般人の年間被ばく限度の1ミリシーベルトを超えてしまう。「ここでの取材は手短かに」と担当者に促され、5分程度でバスに戻った。

原子炉建屋の西側には、放射性物質を含む水を貯蔵した高さ約10mのタンクが約千基立ち並ぶ。汚染水の総量は110万トンの。空き地だった土地を利用しているが、1週間から10日ごとにタンクが1つずつ増えているという。汚染水の最終処分の方法は決まっ



ていない。

1～4号機の周りは、地下水の流入を防ぐ凍土遮水壁で囲まれている。担当者は地下に設置された遮水壁のパイプを見せながら「汚染水の増加防止に効果が高い」と強調した。

約1時間の取材で、記者の被ばく量は0.04ミリシーベルト。胸のエックス線検査程度だった。完全な廃炉の見通しについて、担当者は「30～40年後が目標だが、1～3号機のうち、どれから燃料デブリを取り出すか今も決まっていない」と話した。

(2019年2月21日)